

報告

Summer Intensive Study Program への参加を振り返って

依田 良子

筆者は、2010年と2011年の夏にスイス、チューリヒにあるユング研究所で開催された Intensive Study Program（以下、ISP）に参加した。本稿では、前半でISPの雰囲気をお伝えし、後半では筆者自身の感想をまとめたい。

ISPは年に2度、夏（6月末～7月始め頃）と冬（2月頃）に行われている。通年、そして何年にもわたる資格取得のコースとは別に、約2週間の短期間で行われるプログラムである。そこではLectureと呼ばれる講義形式の授業とSeminarと呼ばれるゼミ形式の授業が行われる。

内容は、「ユング心理学」の基礎的な物事の捉え方・理論を示すものから、その核心に迫るものまで幅広い。これは、ISPが「ユング心理学」に親しみのある人々だけでなく、心理学を専門としない一般の人々に公開されたプログラムであることに配慮したものではないかと思われる。実際、筆者が参加した2度のISPには、会社員、小説家、精神科医、マッサージ師、大学院生、長い間「ユング心理学」に依拠せずにTherapyやCounselingといった仕事に携わって来られたPsychotherapist、Counselorといった多彩な職種の人々が参加されていた。今回が初めてという人、25年前の参加以来2度目という人も居られ、年齢も様々であった。ISPのみの参加者は大凡30人程で、世界各地から参加しておられた。昨年はヨーロッパ・台湾・香港からの参加者に多く出会ったが、今年はブラ

ジル・メキシコといった国々からの参加者が多く見受けられた。

更に、Lectureには資格取得候補生(Candidate)も多く参加されており、親しくなった方とは、講義について意見を交わすことが出来た。また、たっぷり確保されているお昼休みや授業間の休憩時間には、通年の授業について、スイスでの生活ぶりについてなど話を伺う機会も得た。事実、昨年のISPの参加者の中には、資格取得候補生となるべく、スイスに滞在することを決めた参加者も居られ、今年、懐かしく顔を合わせた。ユング研究所に集う方々は、親切な方が多く、筆者の話す粗末な英語にも熱心に耳を傾けて下さった。日本に戻ってからも、先の震災の際には複数の方から日本を案じたメールをいただいた。

また、ISPには、なかなか体験することのできないツアーが幾つか組み込まれている。その1つに、Einsiedeln地方へのバスツアーがあった。C.G.Jungが晩年を過ごしたとされるチューリヒ湖畔に佇むボーリングンの塔や庭をお孫さんの案内で見学させていただいた後、Einsiedeln大聖堂の荘厳な雰囲気を味わった。もう1つは、C.G.Jungが妻と共に暮らした家の書斎の見学ツアーである。この家には、今もなおC.G.Jungのお孫さん家族が住まわれている。自分の祖父を慕ってやって来るにしても、赤の他人に現在住まわれている家の中やお庭を見せ、祖父との思い出をお話くださるというご

厚意に頭が下がる思いであった。このようにして、ISPの時間やそれを取り囲む環境のあちらこちらにC.G.Jungの息遣いを感じることが出来た。

その息遣いに触れ、世界各国から招聘された講師がそれぞれに工夫されたLectureやSeminarに参加する中で、筆者が痛感したことがある。それは、「理論や技法を理解し、使うためには、それを自分自身で感じ、身体で味わってみることが不可欠である」ということである。

C.G.Jungの著作の多くは、現在日本語にも翻訳され、図書館や書店に行けば誰でも手に取ることが出来る。そればかりか、近年は彼自身がどんな体験をしていたかということについて個人的に書き残した記録も書籍として公刊されるに至っている。しかし、その全てに目を通したところで、全ての文章を一言一句覚えたところで、その本当の意味するところに行きつけるわけではない。それは、ISPに参加しても、いかなるJungianの語りに耳を傾けても同じことである。

だからといって、それらのことに意味がないと言いたいわけではない。筆者が言いたいのは、それら全ては1つのスタートラインに過ぎないということである。先人たちの知識や体験に触れた時、それらに込められているものがどう感じられるのか、自分のどの部分に響くのか、響かないのか、それらからどんなことが連想されるか、それは自分だけに特別に意味が感じられるものなのか、といったその知識や体験が発しているメッセージを受け取り、自分なりに吟味する必要があるのではないかと考えるのである。

当たり前のことを何を賢しげに言うのか、と思われるかもしれない。しかし、その当たり前のことが如何に難しいことであるか、筆者は

ISPに参加し、目の当たりにしたのである。

「ユング派」や「ユング心理学」は、多くの固有名詞を持っている。「元型」「グレートマザー」「アニマ」「アニムス」「シンクロニシティ」など数えきれないほどあげることができる。それら固有名詞は、先人たちが深みへ降り、掴み取って来たものの結晶である。だからこそ先人たちはその言葉をまるで、自分自身の一部として、あるいは生きて血の通ったようなものとして使う。すなわち、先人たちの膨大な著作や語りの中にあるのは、あくまで「その人の」答えであるともいえる。そうであると知っていれば、その言葉を軽々しく多用することは出来ないし、すべきではない。しかし、それらの言葉には不思議な魔力があるようで、「ついで」自分の言葉のように使いたくなってしまいうのである。このことは、以下の問いにもつながる。

この世界にはユング心理学に限らず、「こちら」をあらわしている、あるいは理解するための用語が溢れ返っている。しかし、私たちはそれらをどれだけ自分の体験をもとに理解しているだろうか。そして、私たちはその体験もまた万能ではないということを実感しているだろうか、という問いである。

専門用語を学び、それらがどのような文脈や背景のもとにどのように定義されているかを知ることが、専門家として必要不可欠なことである。しかし、専門用語さえ知っていれば、それらの専門用語に当てはめさえすれば、何かがわかったような気になっていないだろうか。それら言葉の意味の共有がいかに難しいかということを実感しているのは本当に自分の体験を元に知っている必要がある。まるで、自分が話している言葉を知らない人が世界にはいないかのように、あるいは、知らない方が不勉強なのだというような態度を取ってはいないだろうか。

昨今、臨床心理士の国家資格化問題が注目さ

れる中、私たちはどのような学びや体験で「専門職」たり得るのか、ということが議論されている。筆者は一介の大学院生であり、その詳細について意見を述べるべき立場にはない。しかし、少なくともこれから「専門職」となるべく学ぶ者として、これらの問いを頭の片隅に置いておかなければならないと思うのである。

筆者はこれらのことを ISP を通じて実感した。そしてこれは初学者として「こころ」と関わり、その専門家として学び、仕事をしていく筆者自身の指針となると考えている。

拙い言葉で綴った文章であるが、以上を2度にわたる ISP の概要と、筆者の私見のまとめ、報告とする。